

安全教育にVR活用

Wi-Fiで複数人が同時参加

北海道の建設ICTスタートアップ企業のネクステラス（札幌市、木下大也社長）は、VR（仮想現実）制作を手掛けるキシブル（同、岸敬介社長）と連携して現場のデジタル化を推進する。土木現場の安全教育に応用する製品提案を行い、建設DX（デジタルトランスフォーメーション）を本格展開する。

同社は、2020年11月に建設業特化型拡張現実（AR）アプリ『TerraceAR』をリリースしている。3次元モデルを現況に照らし出すもので、iPhone（アイフォーン）やiPad（アイパッド）などの情報端末を現場にかざすと、どのように構造物が配置されるか確認できる。手軽なARツールとしてユーザー数も増加している。

キシブルが今回開発した「i-VR-E-S」は、インターネットに接続せずにVR動画を複数人で同時視聴でき、コミュニケーションを取りながら実習授業が可能なVR教育共有システムとなる。VRゴーグルをWi-Fiルーターを介してつなげる仕組みとなっており、ネット回線を使わないため、電源がある室内であれば、どこでも利用できる。

一度に5—10台のVRゴーグルと通信が可能で、参加者はアバターで参加して映像上でコミュニケーションを取ることができる。

キシブルは2020年設立のベンチャー企業。医療分野の人材育成が発端となり北海道科学大と連携し、X線撮影現場をCG化する「バーチャルX線撮影トレーニング」を21年1月



ゴーグル同士をローカル接続し
VR体験を複数人で共有できる

に共同開発した。併せてVRゴーグル同士をローカルWi-Fiでつなぐ技術を確立した。

ネクステラスは、この技術を土木の安全教育に応用して、製品展開を本格化する考えだ。

同社の木下社長は「映像にメモを残せるため、KY（危険予知）活動やヒヤリハットの知識を蓄積できる。安全教育や現場見学をVRに置き換えたい」と話す。「顧客の近くで現場のデジタル化を後押ししたい」と考えている木下社長のもとには、既に札幌市内の建設会社から問い合わせがあるという。

価格はシステム導入が70万円で、1台4万円のVRゴーグルを台数に応じて加算する。

岸社長は「今後も開発・改良を進め、アップデートにも無償対応していきたい」と語る。医療分野の技術で建設業のDXを加速する。